パーリ原典 Sārasaṅgaha の発見

佐々木現順

一　発見の経過

筆者が一九六一年に米国よりの帰りに渡欧し、デンマークの王室研究所にいた頃、かねて嘱目していた Sārasaṅgaha の一写本を入手した。これを縁としてその後、関係資料を集めて来たが、一九六一年より一九六六年の間に英国及びセイロン等にて入手しうる凡ての写本を得た。遺憾なことはサッダテイッサ長老所有の二本のシンハリーズ本が今なおみることが出来ないということである。ロンドン在住の彼は自ら持っていることをパーリ・テキス協会長ホーナ博士に告げていたので博士を通じて交渉中であるが今なお入手していないから真偽のことはわからない。

そのうち一九六六年―六七年の間、筆者がハンブルグ大学で講義のため在職していた機に更に各地の図書館をもさがして異本を集めた。遂に得たものは五種であったが、一九六七年ロンドンに於てパーリ協会関係者が集り、本テキストの校訂出版を私にまかすということになり、数年の間に出版する約束をして持ちかえった。元来、このテキストはサッダテイッサ長老が手持ちの二異本だけで校訂したい希望であったらしいが、私の異本が有益だろうというので私にまかすという話し合いになったとのことである。

ところが、日本に持ち帰った五種の異本を全部ローマナイズし更に対照校訂しつつある間に七ヵ年間も過ぎてしまった。ホーナ博士は本論に良い序文を望み、その中に年代考証・著者・文体・内容等について詳細な論文を附加することを強く望んでいるため、仕事は仲々はかどっていなか

った。

たまたま一九七四年七月―八月の間、国際東洋学者会議で研究発表の機をえたので、その間を利用して又々、私は渡仏した。勿論、ロンドンでこの出版についての話し合いも渡仏の目的でもあったので、この件をめぐり、パーリ協会出版のルール及び引用経典の見付け方などホーナ博士や、ハイデルベルグ大学のコップ博士などから多くを学ぶ目的でロンドンやドイツ・デンマークなど歴訪したことであった。

本テキスト校訂と研究はまだその途上にあり、完結までにいましばらくの時日を要するものである。しかし、中間報告ぐらいの意味で、その内容とテキスト異本を紹介しておくことが、本書の完成を待っているロンドンのパーリ・テキスト協会への義務でもあり、学界のためにもなろうかと考えて研究経過の一端を記しておきたい。

二　各種の異本紹介

㈠デンマークの王室図書館は一九六二年に Catalogue of Ceylonese Manuscripts in Danish Collection を出している。しかしこの目録は当時一般に求められず、又、全目録の一系列の中に入っていたので全目録が出るまでは一般に入手出来にくいものであった。王室図書館の Dr. Haar や王室研究所のパウリ及びメラークリステンセン氏等の助力で詳しく点検しえたことであった。

本テキストは貝葉一二六葉から成り、サイズは 51.2×6.2cm である。ただ第一頁だけは 19cm の部分だけシンハリーズ原典が書かれている。シンハリーズ文字はかなりくずれた古い字型であるが明瞭に出ている。極めてまれではあるが、筆写誤りと判じたところは各箇所の上・下段に挿入して追加せられている。これは本テキストの如き比較的新しい写本（十三世紀頃）の特色でもあろうかと思う。この異本をいま略号Kで示しておく。なほ写本をはさんだ木製版には有名な Rask の自筆で "Sārasaingaho 54" と記入されている。

㈡ロンドンの India office library に保管されているものである。一五六葉で字体はK本より明瞭である。Lの略符号を与えよう。

㈢一八九一年にコロンボより二五六頁のシンハリーズ版が出版されたことがある（S^1）。Y. Somananda Thera作である。その脚註（S^2）に諸様のヴァリエーションが挙げられていて参考となるが殆んどの読方は本文の方が理解し易い。このテキストはコペンハーゲンの Catalogue, 1912,

p. 60 には一八九八年の刊本としているが、これは一八九一年の誤りかと思う。一八九八年版は見出しえない。

私が入手したこの刊本には斯界の大家たる Helmer Smith 自らの手になる書入れがある。これは私にとって単なる資料というだけでなく、得がたい意味を持つ。というのは Helmer Smith は Trenckner によって始められた大事業 "A Critical Pāli Dictionary"（現在読行中）を再校訂及び再出発せしめた創始者であり、彼の協力者Hans Henderiksen と共に一九四八年コペンハーゲンより第一分冊を出した。このユネスコの大事業に私も一九五九年招かれたが、渡欧を延期し、後で一九六一年アメリカの帰途コペンハーゲンにより、デンマークの Royal Danish Academy で二ヵ月同辞書作成に協力していた。これはユネスコの招待であった。このとき Smith, Trenckner などの筆蹟に親しく接し、感激をあらたにしていたことであった。而も Smith と同じ場所でいくらかの仕事をなしえたことを誇りに思っていた。その Smith の読んだテキスト及びその書入れは少からず私に斯学との不思議な縁を強く印象づけてくれたことである。

このような生涯をかけた仕事は学者の能力といい、環境といい、ヨーロッパでなくては成じ難いものであり、日本の中では全く成し能はない難事業であると断言出来る。それほどヨーロッパに於ける斯界の標準の高いことを認めねばなるまい。

Sārasaṅgaha はこのような因縁で私と結び付いたのであるが、これは別として学問的に言って、Smith の書入れは極めて有益である。元来、本テキストは言うまでもなく僧院に伝わって行った原典であって研究を主としたものでなく経として読誦せられていたものであった。それ故に、引用句並びに所引の文章の典拠のヒントはどこにも與えられていない。それらを他のパーリ典籍凡てにわたって裏付けうる限り調査しなければならないという仕事は大きな難事業である。それのみならず、後で内容を紹介するところでも述べたいことであるが、本テキストには後世になって変化して行ったと思われるパーリ語或はパーリのイディオムがかなり現われているから現存のパーリ辞典のみでは理解し難い熟語も極めて多い。又、Smith のノートに見られた引用テキストは必ずしも刊本に限られておらない。他のシンハリーズ異本をも用いたようである。故にその所引経典或はパーリ論書の章節・頁を identify する仕事もそれ自体かなりの労力を要する。このような不便もあるけれどもこの書入れは校訂及び脚註を作る上に又とない助力

を与えてくれる。

㈣K. E. Neuman の Das Sārasaṅgaho, Leipzig, 1890 がある。Nと略記する。この刊本は本テキストの第一章だけの研究である。用いた異本はロンドン写本（L）とコペンハーゲン写本（K）とであるが、ローマナイズの過程でかなり読み誤りが見られる。従って独訳も意味がとりにくい。ローマナイズした部分は七頁だけであり、独訳は七頁、それに註八頁をまとめて附加している。註はニカーヤ及び経外の諸原典を参照した労作といわねばならない。因に Neuman の本研究はライピチッヒ大学へ提出されたドクター論文である。

三　述作者と年代

本テキストの述作者について最後の章に曰く、

Dakkhiṇārāmapatino Piṭakattayadhārino Buddhappiyavhayatherassa yo sissān' antimo yati
Tena Siddhatthanāmena dhīmatā sucivuttinā
Thereṇa likhito eso vicitto Sārasaṅgaho.

この偈によれば述作者は Buddhappiya の弟子 Siddhattha であったことになる。Buddhappiya は Fryer（"Note on the Pāli Grammarian Kachchāyana", Calcutta 1882, p. 10）によれば一五〇〇年頃の Parākrama Bāhu I の治下で生存していたという。この文献は Neuman の Das Sārasaṅgaho (p.7) にも採用されている。当時なお南インドに仏教の影響も残っていたと言われよう。又、Grünwedel（"Das sechste Kapitel der Rūpasiddhi", Berlin 1883, p. IV.）の暗示が真実とすればチョーラにあった或る宗派の長老であった Dīpankara Buddhappiya のことであると言いうる。かくの如く、これらの諸先学の研究成果をふまえて時代を考証すれば、その弟子たる Siddhattha は十一世紀後半より十二世紀初頭の論師ということになろう。

他方、これより約一世紀後にみている学者もいる。即ち、本テキストはコペンハーゲンの Catalogue of Ceylonese Manuscripts in Danish Collection"（Royal Libray, 1962, p. 59）には十三世紀—十四世紀に Dakkhiṇārāma の長老であった人であるとされている。併し、それに対する論証はあげられていない。

このように歴史的背景を考慮に入れて著者の考証をすすめる外に更に内面的にパーリ語の文体・熟語に現れた内容の調査が重要な考証の手段でもある。同年代と思われるパーリ摂阿毘達磨論等の後期論書との文体・熟語の比較研究

が必要であろう。但し、ここでは本テキスト末尾の前掲の偈を重要な資料として紹介しておくにとどめたい。

四　本テキストの諸研究

Sārasaṅgaha の価値を最初に認めたのはチルダースである。彼の辞書の中で本テキストを以て教義に関する文献の中で新しい編集によるものであってセイロンで最も流布されているという意味を述べている（"Pāli-English Dic.", p. XI）。又、オルデンベルグは本テキストを以て、仏教教学と宇宙論の簡潔な百科辞書であるといっている（J. P. T. S. London, 1882, p. 125）。

Neuman によると本テキストの内容摘出した文献として Westergaard, "Codices orientales bibliothecae regiae Hauniensis Pars prior", Havniae 1846, p. 47 とか或は Hardy の "manual", "Eastern Monachism" にあげられた興味ある諸種の断片の存在が指示されているが遺憾ながら現在見ることは出来ない。

このようにして本テキストの従来諸学者による研究はただ注意せられていたというだけであって未だ本格的研究の対象とせられるに至らなかった。その理由はセイロン刊本以外に異本対照による完全な校訂本が出版されておらず、またローマナイズ本としての普及版も世に出でていなかったためであろう。

併し、セイロンではその普及・研究もなされていた。例えば、シンハリーズの散文 Saddharmaratnākaraya（Vimalakīrti）は本テキストより資料を引用しており、又、現代のシンハリーズ解明書 Sanne of Sārasaṅgaha もあり、これは Kalutoṭa Dhammasirititissa によって書かれた。その一部は1898年に出版されているということが報告されている（前掲 Catalogne, p. 59）。

五　内容紹介

Sārasaṅgaha は仏教特に分析的教学を主とする論的傾向を有する論書である。仏陀の全言を集めただけのものではない。論書といっても、これまたアビダルマ論書一般に見られるような教義の単なる抽象的分析に終っているという形式的論書でもない。そこには教義の分析と共に極めて多く比喩或は説話的論述が施かされている。

以上の点に加えて更にそれはミリンダパンハに近似した書き出しを以て始めらている。そこに屢々引用されているものはニカーヤ・ジャータカ・ダンマサンガニーに対する仏音の諸註釈である。そこには既述の如く、五世紀頃の註

釈にも又、諸論書にも見られない熟語或は當時の社会からとったと思われる新しい比喩なども混在している。これらを参照するとき、従来、理解し難かった語句の解釈や内容が極めて明瞭になることが多い。この意味で本テキストは重要な解明を多く蔵した宝庫であるといっても過言ではないであろう。

諸種の問題—教養・宇宙論・伝説—が網羅されているということは三十九章の題目をあげれば明らかであろう。その前に全章の数え方に関する問題があるので先ずその点について一言しておこう。

オルデンベルグ（JPTS, 1882, p. 125）は写本の章数を三十九章としている。これについてノイマンはこの数え方を正当であると評価する（Das Sārasaṅgaha, Leipzig, 1890, p. 6）。これに対して、Westgaard（ウエストガー）は四十章となしている。彼は第三章と第四章の間に Cakkavatti-vibhāvanakathā なる一章を挿入している。このことはノイマン教授も指摘している。ノイマンはこの数え方の誤りは Westgaard が第四章の初めにある一句即ち Munino cakkavattino ca cetiyakathā を第五章とみたからであろうといっている。

コペンハーゲンのカタログによると Sārasaṅgaha 写本の説明分析のところで Westgaard と同じように四十章としている。而も、このカタログでは第四章が Cakkavatti-vibhāvanā-kathā であり、第五章が Munino cakkavattino ca cetiya-kathā であるとされている。ノイマンの言うように尤も第四章には前者はいかなる写本にも別出されていない。このことは同感である。それ故に、コペンハーゲンのカタログが何故に写本にあげていない章を独立して第四章としたのか疑問である。又、同カタログで第五章としてあげられているものは写本の目次によれば muni-cakkavatticetiyakathā となっているもので先に示されたような munino……cetiya-kathā ではない。目次として出すならば写本の目次の如くあるべきであろう。又、その内容を検討すると第四章は第五章に入っているから別出する必要はない。かくみると全章の数は三十九章であり、その第四章の正しい目次は先にも言ったように municakka-vatticetiya-kathā というように修正すべきであろうと考える。

次に、内容と諸問題の在りかを示す便宜のために煩をいとわず全章のトピックを写本に準拠して上げておく。

1. abhinihārakathā. 2. tathāgatassa acchariya-kathā. 3. pañca-antaradhāna-k°. 4. municakkavatthicetiya-

k°. 5. sammajjanīyā phala-, 6. dhamme acchariya-. 7. saṇghe acchariya-, 8. niddāvibhāvanā, 9. supinavibhāvanā-, 10. ratanadvayasattaka-parivattana-, 11. saraṇagamanassa-bheda, 12. sīlānaṃ pabheda, 13. Kammaṭṭhānasaṇgahanayo, 14. nibbānassa vibhāvanaṃ, 15. ratanattaye agāravavibhāvanakathā, 16. janakādi-kammaṭṭhāna, 17. ānantariyakammavibhāvanaṃ, 18. micchādiṭṭhivibhāvanaṃ, 19. ariyūpavādavibhāvanaṃ, 20. Kuhakādinava-kathā, 21. macchera-kathā, 22. tividhaggivibhāvanattha-kathā, 23. dānādipuñña-saṇgahanayo, 24. sattānaṃ āhārabheda°, 25. yonivibhāvanaya°. 26. pumiṭṭhipariviṭṭhana, 27. yuvatīnṃ sarūpavibhāvanaṃ, 28. paṇḍakānaṃ vibhāvanaṃ, 29. nāgavibhāvanakathā, 30. supaṇṇānaṃ vibhāvana°, 31. petānaṃ vibhāvana°, 32. asurānaṃ vibhāvanaṃ, 33. devānaṃ vibhāvanaṃ, 34. mahīvaḍḍhanakathā, 35. vuṭṭhivātādinaṃ saṃgahanayo, 36. pakiṇṇaka-kathā, 37. iddhividhādisaṇgahanay, 38. iddhivibhādisaṇgahanayo, 39. lokasaṇṭhiti.

以上のようにすれば、四十章でなく三十九章となる。この点、ヨペンハーゲンの写本Kの目次が正当であると考える。この目次によって解るようにそこで取扱われる問題は既述の如く教義と宇宙論等に関する諸問題であるが、そこには他の論書では見られない独自の分析も与えられており、而もそれからして従来の理解に対する反省と再考を促すような暗示も多く得られる。その例を示すと共に校訂の相違がどのような変化を与えるかという例をも共に以下、示しておこう。勿論、今はその諸例の中でたまたま見出しうるところのものを挙げるだけに止めるが、それによって、本テキストの持つ意味がいくらかでも把えられるならば、それを内容紹介の一部にかえたいと思う。

六　本願・abhiniihāra, mūlapraṇidhāna

第一の例即ち暗示的な問題を与えている例として次の偈をあげよう。

Manussataṃ, liṇgasaṃpatti, hetu, satthāradassanaṃ, pabbajjā, guṇasaṃpatti, adhikāro ca chandatā: aṭṭhadhammasamodhānā abhiniihāro samijjhati Abhiniihāro ti mūlapaṇidhānass'etam adhivacanaṃ.

（人間性・〔男女〕性・能力・師とのめぐり合い・出

家・徳の成就・献身・強い意志。かかる八法を結合するから〔仏たらんとする〕誓願が起る。誓願というのは根本的〔強い〕願の同義異語である）

この偈と長行の一部は菩薩が仏たらんと願うときに欲しなければならない諸制約を八種に分けたところであり、長行はこの八法を註釈していくという構成になっている。

さて、本偈に関し、ノイマン教授は彼の学位論文たるDas Sārasaṅgaha, pp. 19—20に於て独訳を与えている。然しそれを検討するといくらかの不備が見られる。

先づ、独訳ではこの偈の始まる前に原文にない文章を出している。曰く「何故なれば〔仏にならんとする〕深い志し（das tiefe Streben）は八法の結合によってのみ現われるからである」と。併し、この文は原文にないから、若し訳者の挿入であるとするならばブラッケットにつつみ入れておくべきであったであろう。今度は原文にあるのに独訳されていないところがある。即ち、原文にある一行“aṭṭhadhammasamodhānā abhinihāro samijjati”である。これは意味の上では既に偈文の前に訳者が挿入した部分と同じであるが、そこでは長行の文「八種の成就を欲しなければならない」の理由として「何故なれば……八法の結合によってのみ現われるからである。」という独文になってあげられている。それ故にやはり原文の独訳が脱落していると言ってよかろう。

次に、独文は〔„Das Streben” ist eine Bezeichnung für tiefes Verlangen.〕とあってブラッケットに入れていて独訳者の挿入句の如くみえるが、これは原文にあるままであって挿入句ではない。原文に“abhinīharo ti…samijjati”とある文の正しい独訳に外ならない。私がローマナイズした原文にコロン或はセミコロンがつけられているのは勿論、原文にあるのでなく、私が読み易くするために附加したものである。

独訳についてのコメントはこれ位にして、次はこのSārasaṅgahaの偈から得られる思想上の暗示について一・二のことを述べておこう。

abhinīhāraという語は多義を有する特殊な語であって仏教梵語のabhinirhāra（abhi-nis-hṛ）に当る。私は今、それを誓願と訳出しておいた。これに対して、ノイマンはStreben或はdas festen Entschlussなる独訳を与える。又、リス・デーヴィズはresolve（Buddhist Birth Stories, p. 52）となし、チルダースはearnest wish or aspirationとなしている。又、パーリ相応部（S. III, pp. 276, 277）には修定者の三昧について、完全なる修定はいかなる者であ

るかを述べるところがある。完全なる修定者は三昧に於て三昧善であるのみならず、三昧に於て熱心な願を持たねばならないことを述べる。熱心な願（引発）というのがabhiniihāraである。これに対する仏音の註(SA. II. p.353)によれば熱心な願というのは三昧に入るときの対象となる業処を熱心に願うことであるという意味に解している。即ち、この語意はチルダースの指摘しているようなearnest wish と同じものである。

然るに、Sārasaṅgahaの前掲の偈で言われている八法は菩薩が自ら仏陀となること(Buddhattam, Buddhabhāva)を願うための根本的諸制約である。それ故にこの語は根本的な願（mūlapaṇidhāna）の同義異語とせられたのである。従って、我々のテキストに於て用いられているこの語はニカーヤの前掲箇処での意味よりも一層強く而も本質的基本的な願望を現わしているとみなければならない。それは単なる願望ではなくして独訳の示す如く、実現によって証しされるような誓願であると考えられる。

このことはabhiniihāraの根本的意味をたどることによっても了解しうるであろう。元来この語の接頭詞abhiは衆知の如く強意ではあるが、それは精神的発展に於ける高い傾向性を意味する。それを得んとする欲求努力である。それと同時にそれに到達しうる能力を発展せしめる心理的術語である。又、nisはこの場合、勿論、否定ではなくして心情的な内面性を外面へ向って分散せしめる意味に用いられる接頭詞である。これは外面的空間的方向への分散を意味する。これに対してpra（paṇidhāna）は内面的な求心的集中的運動を表わしていると考えられる。それ故にabhiniihāraはpaṇidhānaと同一視せられたのであろう。前者は心理的願いが遠心的にひろがって行く運動であるに対し、後者は同じ心理的願いが求心的に高まって行く運動である。外と内という両面に於て高揚して行く心理的願いが両熟語を一つにむすびつけていると解したい。かくて、nis-hṛ（abhi-nis-hṛ）は自らを静止している状態から取り出して或る目的に向って進むという心理的様態である。それ故にnis-hṛ（abhi-nis-hāra）はto take oneself to の義ともされる。又to direct（Pāli Concordance p. 220)とかbeing bent on（PED. p. 67）とせられる。これと同義とされているpaṇidhānaのniはそれ自体、心の定着（fixation of mind）を意味する。換言すれば、流れを止めることである—ni-yama, ni-rodha, ni-yoga, ni-vṛtti 参照—。これはあだかもabhiniihāraのniihāraの心理的様態と合致する。

かくの如き分析によって abhiniihāra は単に坐したまま願望しているというものではなく、行為に裏付けられた願いである。“bringing into motion”（CPD. p361）といい得るものであり、そこからして resolve, determination とか或は Streben という第二義・第三義が派生するであろう。

これに対する仏教梵語は abhinirhāra であるが、しかし、その意味はパーリの示す如き「願い」という意味が失われてしまっている。それに代って realization, accomplishment の意味となった。Edgerton も挙げている如く、例えば “pūrvabodhisattva-praṇidhānābhinirhāraṃ ca saṃdarśayet”, Gandhavyūha 5. 20（先なる菩薩の願の成就を示めすであろう）なる用例がそれであって、パーリの Sārasaṅgaha に出ていた如く、abhiniihāra と paṇidhāna とは同一視せられない。願の実現或は成就が abhinirhāra であるとせられるに至った。併し、この意味の変化はパーリのそれと全く異ったものではなく、既にパーリ語としてのこの語が単なる希望・願い等よりも強い誓願であったことは既述の如くである。而も、強いといわれる根拠は誓願の成就が既に決定せられているというところにあった。かくの如く考えることが許されるならばパーリ語のこの概念それ自らに realization, accomplishment の意味が存していると言ってよい。それ故にパーリ語としての abhiniihāra には「誓願」と共に「成就」の意味も派生的な意味として挙げられているのである。かくすれば仏教梵語 abhinirhāra となった時、パーリの第一義が消滅せられて第二義のみ残されて来たということになろう。第二義たる realization（成就）だけではこの概念の語源的解釈が出来なくなる。語源から直接に「成就」の意味は出ないからである。パーリ語の持っていた多義性が大乗の仏教梵語になると意味が少くなく限定されるか或は原意を失って言外の余義が追加せられるに至るという言語発展の歴史がここでも実証せられている。

Abhiniihāra は単なる願いというものでなく、「実現を裏付けとした願い」即ち誓願であるという心理的デリカシーはインド一般の心理的乃至哲学的説明には屢々現われるものである。必ずしも考え過ぎた解釈ではないのである。同傾向の心理的哲学的デリカシーが見られる他の例を一つあげるならばインド思想の時間論にも出てくる。即ち、時間論の中心的概念たる作用（kāritra）を説明するにあたり、作用は果を引く（ākṣepa）ものであるけれども果を生ずる（janana）ものではない（拙著『阿毘達磨思想研究』四〇一頁）

と言って「引くこと」と「生ずること」という一見して同一視し易い状況をも区別している如くである。

さらにこの問題から暗示を受けることは本テキストに出る mūlapraṇidhāna と浄土教でいう弥陀の pūrvapraṇidhāna（本願）との関係である。前者は abhiniīrhāra と同義異語とされていた。即ち、mūla（根本）とは最も強い根本的な〔誓願〕であった。これに対して後者は pūrva である。pūrva は根本という意味ではなくして時間的概念であって時間的に前なるものの義である。従って本願という漢訳は「時間的に前に建てられた願」である。屢々original vow と英訳されるがこれは漢訳の英訳に過ぎない。梵語からの英訳と言われない。梵語からすれば〔法蔵菩薩によって建てられたところの〕時間的に前なる願即ちprevious vow とでも英訳すべきものであろう。ともあれ mūla と pūrva とは共に本願の「本」にあたるとしても、その内容に於て同一ではない。前者は質的であり、後者は単に時間的なものに過ぎない。

七　仏性・buddhatā, buddhatta, buddhabhāva

buddhatā といえば我々は直に「仏性」と言いかえる。而も、仏性とは仏となる可能性であり、衆生に内在している種子であると理解されている。大乗仏教に於ける仏性論もこのような思考の上で展開して行ったと思われる。この概念はパーリ仏教の中でも—後期になってであるが—現われてくる。然し乍ら、その意味は仏の本質或は種子というものではない—ということが注意されねばならない。Sārasaṅgaha はこういう問題を改めて提起する。

即ち、本テキストによれば既述の如き八種の法を求めねばならない者は「仏となることを願求する者」（buddhattaṃ patthayato）であるという。ここに顕われている buddhatta は他のパーリ論部で用いられている buddhatā (DhA IV. 228, Th 4) と同じく仏たることの意味であって衆生に内在する可能性乃至種子としての仏性と全同であると言うことは出来ない。換言すれば覚証そのものを言うのである。Visuddhimagga (p. 209) に buddhattā Buddho とあるのは覚証しているから仏陀であるという意味であるが、この義は他のいかなる場合に於ても通じていると思われる。仏陀であることという意味の buddhatā, buddhatta はまた buddhabhāva とも言われる。Jātaka 1. 14 の buddgabhāvāya abhiniīhāra の義は「仏とならんとする誓願」である。buddhabhāvāya は buddhattāya(J 1. 15) とも換言されている。すなわち本テキストに出る buddha-

tta もまた同じく仏となることであって抽象的な仏性という内在的要素を意味するのではない。この義がパーリ文献では論部の中でも新しい Sārasaṅgaha に至るまで一貫して保たれているということを注意しなければならない。それ故にパーリ文献に於て、buddhatāなる概念があっても、それは抽象的に理解せられた仏性ではなく、仏たること或は仏の内容たる覚証そのものに外ならないと解すべきであろう。

以上挙げた二種（abhinīhāra と buddhatta）の例は Sārasaṅgaha が我々に与える教示と示唆の例である。

八　写本選択の事業

写本特に、シンハリーズ本の読解は極めて困難な業である。ノイマン教授によってなされた本テキストの数頁にしても仲々の労作であるがそれにもかかわらず写本の誤読と思われる節もある。いまその例を一つあげて本テキストの諸異本が相互にかなり出入れのあるという事実を示しておきたい。

ノイマンの Das Sārasaṅgaha p. 15 に出でるところであるが次のようにローマナイズされている。“na khuppipāsito uppajjati,,

この文はロンドン版（L）には欠けている。コペンハーゲン版（K）に na khuppipāsito とあるとノイマンは脚註している文である。ノイマンはこれに独訳を与えて曰く、

“nicht wird er als ein Hunger und Durst gepeinigter Peta geboren.”（Das Sārasaṅgaha p. 21）

然し、原文の khuppipāsito は khuppipāsā 即ち饑餓と渇の義であるが、彼の独訳に見える peta なるパーリ語はここの文には存しない。元来、ノイマンによって脚註にあげられたものは事実はそれと違っている。正しくはK版には次のようになっている。

“khuppipāsi na uppajjati”

これはノイマン自身の手で khuppipāsito と校訂したと思われるが、khuppipāsā なる女性名詞を過去分詞にする例は見出されない。といってもK版の如く khuppipāsi という形では意味をなさないからこの通りには校訂出来ない。

ところが、コロンボ版（S_1）によれば曰く、

“khuppipāsikanijjhāmaṭaṇhikapetesu uppajjati”

即ち khuppipāsika は khuppipāsā＋ika であって petesu（餓鬼界）を形容するから正しい。それだけでなく、この版（S_1）では nijjhāmaṭaṇhika（燃えつくす渇）

と petesu が追加せられている。私はこの版の読み方を採用したい。

そうするとノイマンのこの部分の独訳は彼の校正した文章よりもむしろS_1版に近い訳である。尤も gepeinigter（苦しめる）という独逸語にあたるパーリ語はS_1版にも存しない。これは意味の上で彼自身追加したと考えられるかも知れない。しかし、かくすれば彼の独訳はまさにS_1版の訳であって彼自身校正したテキストの訳ではないという皮肉な結果となるであろう。

なおS_1版のように読めば渇が二回反復されていることになる。即ち、pipāsā と nijjhāmataṇhā とである。前者は「渇」であり、後者は「極度の渇」を意味しているという差のみとなる。

khuppipāsā は khudā-pipāsā であるが、それは khudā + taṇhā ともなり（Petavatthu II. 1.）共に饑餓と渇を意味する。今は更にそれに nijjhāma（SK niḥkṣāma）を加えて「燃えつくす渇」としたのであって同語反復ではない。

以上の如く、Sārasaṅgaha は比較的新しい文献であるが重要な資料であると言える。パーリの伝統がその正しい仕方でとらえられつつ伝持されているだけでなく、大乗典籍で用いられるに至った仏教梵語との区別を明確となしうるための好き資料であると言えよう。

九　Sārasaṅgaha と Dr. F. R. Hamm 教授の急逝

最後に追悼のことばと共に深謝の意を表するため一言附加したい事がある。それは畏友ボン大学教授 F. R. Hamm 博士の急逝である。そもそも博士と私の交遊は一九五四年以来、二十年間続いた。ジャイナと仏教学の世界的権威であり、その業蹟は屢々私のレポートに現われたので周知と思う。彼はこの Sārasaṅgaha の資料収集を助け、又、貴重なノイマンの Das Sārasaṅgaha 及びその研究を入手出来たのも博士の支援の賜物であった。一九六七年彼との最後の会合に於て彼は私の本テキスト関係の資料全部をマイクロ・フイルムにしたいと懇願した。私は私の資料をただ彼のボン大学印度学科にのみ保存することを約して承諾したことである。彼は私の肝胆相照す畏友であってインド・ドイツ・デンマーク等の在外中、影になり表になりつつ友情を深めてくれていた。ライン河を惜景とした美しいボン大学の校庭で共に語った彼を偲ぶ。彼は一九二〇年十月八日に生れ一九七三年十一月十一日、その五十三才の誕生日を静かに閉じた。いま Bonn-Poppelsdorf の墓地にねむる。私を哀愁の谷に落し、寂滅を感ぜしめた博士の急死は私にと

っては曠野を吹く木枯の如く蕭々として寂しい。併し、私の仕事を援けてくれた彼の熱意を思うとき私の Sārasaṅgaha の仕事に私は彼の脈搏すら感じとるのである。一言、私情を述べて、硯学の訃を我が学界にも伝え以て哀悼の辞としたい。（一九七四・七・二〇）。

（本学教授　仏教学）